

# 社会で必要とされる英語発信力に関して

関谷 哲雄 (鷗友学園女子中学・高等学校教諭)

## 1. 英語学習の目的

外国語学習、この場合は英語学習を示すが、その目的は何だろうか。母国語以外の言語を学習・習得することによって得られるものは何だろうか。いわゆる知識・教養を積み上げることは当然であるが、対象が言語であるがゆえに、それだけでは不十分である。つまり言語を学習し、習得することの大きな目的・目標は、「使えるようになること」に他ならない。

実際に使用した教材の文を理解できる、ということは何を示しているのだろうか。まずは語彙がある。使われている単語の意味が分からなければ、文全体の理解には及ばない。また、文全体を支配している文法の構造が分からなければ、何を言おうとしているのか分からない。さらには、文脈や前後関係が理解できて、ようやくその「文」が分かったという段階に到達する。そのためには、何よりも予習・復習の積み重ねが大切とされてきた。まずは新出単語の意味を調べる。そしてその課で学ぶ新しい文法事項の説明に耳を傾け、練習問題を通してその事項に慣れ、和訳する。中等教育の英語学習は、概ねこのようなスタイルで進められてきたのではないだろうか。少なくとも筆者の中学・高校時代は、そのアプローチを当然のことと受け止めていた。

しかし、そのままでは英語を使えるようにはなっていない。筆者の英語学習は、ひたすら単語の意味を調べ、スペルを覚え、文法問題をこなし、ノートに和訳を書き、全体的な理解に努める……その連続であった。当時は、使えるようになることはあまり考えたことがなかった。使えるようになるには別のトレーニングが必要なのであろう、と自分なりに気づいたのは高校時代であった。また英語の成績が良いことと、英語自体に親しんでいること、学校で使う教材ではなく生の英語を理解する力などは、また別のものであるということも次第に理解するようになった。

同時に、「最低でも中高6年間、場合によっては大学でも英語を学ぶのに、ろくに話せないのは何故なのか？」という不平不満、苦情も当たり前のようによく叫ばれるようになった。いわゆる国際化が進み、これまで以上に外国・外国人との接触・交流が頻繁になってきた結果、社会が実践的な英語力を必要としてきたのである。中学・高校で学んだことが実践的な力として獲得されたか、いつでも使えるような知識・技能として定着してきたか、という角度から考えてみると、例えば数学や物理・化学などの教科・科目は高度になればなるほど日常生活からは乖離してしまうだろう。ここでは教科・科目間の共通性や相違点を指摘することが目的ではないのでこれ以上は触れないが、英語教育にある程度の年月を費やしてきた者としては、英語は不当に扱われているように感じる時もある。せっかく多

大なる時間とエネルギーをかけて学ぶ英語だからこそ、「身につける」「使えるようになる」というスタンスでこれからのアプローチを考えていかなければならないだろう。

## 2. 社会で必要とされる英語力とは？

日本でこれほどまでに英会話教室がたくさん存在した時代はなかったであろう。具体的な数字を調査したことはないが、首都圏の主だった駅周辺に複数の英会話学校を見つけるのは困難なことではない。電車内でも、必ずと言っていいほど英会話教室の広告がある。時期によってはテレビコマーシャルを流す時もある。世の中はそれほど、「話せる力」を求めている。会社に勤務する社会人はその部署にかかわらず英語学習の必要性を感じているだろうし、学生は純粋に「話せる力」を獲得することを欲し、同時に就職に有利な条件と考えている部分もあるだろう、業種・職種によっては英語が使えることが当たり前の場合もあるだろうし、そのような場合に備えることが英語学習のモチベーションになっていることもある。

このように考えていくと、少なくとも中高の6年間、大学で学んだ場合はさらに2年間もしくはそれ以上の月日を英語学習にあてているのだが、使えるようになるためにはさらに別の学習が必要ととらえられていることが分かる。また、これまではOJT (on the job training) や社会研修を通して培われてきた英語力が、最近では事前にその力を獲得していることが求められているようだ。ある新聞の記事では、某総合商社の入社前研修の様子が紹介されていた、その会社では、インターネットなどを通じて入社前に100時間の中国語学習を義務づけているという。「何故中国語なのか」という問いに対しては、「これからの市場動向を考えると中国語ができる社員の育成が急務であり、また英語を使える力はすでに当たり前のことになっているから」という答えであった。このことはいくつかの重要な点を示唆している。つまり英語の必要性の度合いとそのレベルを明確にしなければ、「何をもちて使える英語力と考えるか」が曖昧になってしまうということである。

企業では語学力は業務成果に影響を及ぼすことにつながる。英語力が大きく影響するような業種・部署では、英語力のみならず、交渉力や説得力、その裏付けとなる市場や商品内容に関する知識やデータの獲得など多くの要素が関連する。仕事で用いる英語という観点からは、流暢さ・発音・豊富な語彙などよりは、むしろ上に述べた総合力がより重要になるのはいうまでもない。

これはビジネスという側面から見た実践的な英語力であるが、海外旅行が日常的になってきたこと、身近に外国人がいることが特別な状況ではなくなってきたこと、映画や音楽などを通して文化・芸術などが翻訳だけではなく生の姿で楽しむことができるようになってきたこと、などの時代背景を考えると、社会はますます国際化が進んでいくことが考えられる。一部の人が高度な英語力を持つ時代から、ある程度英語が使えて当たり前の時代へ推移しているように思われる。また、外国イコール英語圏、外国人イコールアメリカ人といったステレオタイプの考え方は徐々に少なくなってきており、世界の様々な国家・地域・民族との交流は、英語をその共通語とする度合いをますます高めていくことだろう。英語を身につければ、新聞・雑誌やテレビ・ラジオなどの媒体を通してダイレクトに様々な

情報やエンターテインメントに触れることができる……そのような時代になってきているのではないだろうか。英会話教室が存続する条件は、生徒が絶えず通っていることであり、そのためには通うこと、つまり授業が楽しくなければならない。そして通うことによって、自分の力が伸びていることを実感できなければならない。

英会話教室に関心を持ち、実際に通う状況を考えると、その人はある程度の語彙や文法の知識があり、意欲も関心もあるが、英語を使う機会に恵まれなかったのではないか、と思われる。ある意味では、英会話学校の隆盛は学校教育で培った基礎力を期待しているだろうし、また集団の一斉教育ではなかなか手が行き届かなかった部分を提供することに大きな意義を持っているものと考えられるのである。そのような視点をも考えて、今後のあるべき英語学習の姿を模索していくことが現段階での課題であると思われる。

### 3 . 入試問題の推移

これまでの英語学習（ここでは「従来の英語学習」と呼ぶ）では、「ヨコのものをタテにする」英語学習およびその力が重視されてきたように思われる。しかしそれではなかなか使えるような力に結びつかない。発信力が育たないのである。発信力を身につけるには、とにかく使ってみること、使う環境をつくり出すことである。ある程度の理解力と学習習慣があれば、例えば海外勤務になって仕事も日常生活もすべて英語という環境にいれば、英語は使えるようになるだろう。しかしこれは誰もが置かれている状況ではない。つまり、普段の英語学習で「いかに使う環境を設定するか」が重要となる。

ここで大学入試問題のあり方と英語発信力の育成の接点を考えてみたい。自ら英語を発信する力は「英作文」で問われることが多い。その英作文問題への対策として、問われやすい構文や熟語を含んだ文を数百覚えることが近道とされてきた時代もあった。しかし上述のような変化とともに、本来の意味の「発信力」を問う問題も増えてきた。受験生の立場からすれば負担は大きいかも知れないが、このような流れに対応すること、発信力を身につけるために日常的に書く機会を増やすことは本来の英語学習の目的に合致していると思われる。「～について自分の意見を英語で書きなさい」といった出題が定着することは、受験生・採点側の双方にとって大きな負担であろう。しかし英語学習は大学受験のために存在するのではなく（他の教科・科目も同様であるが）、使える力を養成することこそが本来の目的・目標となるはずだ。入試が変われば、受験生・生徒のアプローチも変わる。むしろその動きを当然とした学習・授業が主流となっていくのではないだろうか。

#### 4 . 中等教育における英語発信力の育成について

英語学習はよく4技能に分けて考える機会がある。「読む・書く・聞く・話す」のこの4技能は、それぞれ2種類の範疇で分けることができる。一つは音声を伴うか、という分け方である。この中で「聞く・話す」は音声を伴う学習であり、「読む・書く」は伴わない学習である。もう一つの側面はinputとoutputである。前者は「読む・聞く」であり、後者は「書く・話す」である。学校教育という現実を考えていくと、一斉授業では「読む・聞く」を多く採り入れ、個別指導では「書く・話す」を重視することになる。従来 of 英語学習においても、理解を徹底させることは困難であったが、これからの時代背景や生徒の将来、ひいては日本および国際社会の将来を考えていくと、さらに発信力の育成を重視した指導が急務となっていくだろう。

#### 5 . 日常的な授業はどうあるべきか - 日常の授業との関連

英語を判じ物のようにとらえ、ひたすら単語を覚え、文法問題をこなしていく。たしかにこれらのアプローチも大切であろうが、これからは生徒が自分の言いたいことを英語で発信できるような力を育てていかなければならない。一つは授業のあり方をどう設定するかであり、もう一つは英語力とは別の視点で、様々なことに興味・関心を持ち、それらに関して自分の言葉で意見を言える状況を設定することである。教材・授業形態のあり方も、理解・演習・記憶というパターンだけではなく、自分で考えて自分の意見を持つことが必要となってくる。問題解決能力以前に、問題発見能力も必要であろう。また、落ち着いて人の意見・発言に耳を傾け、意見の相違を当たり前としてディベート・ディスカッションができるような体制がより重要となってくるだろう。一口に発信力と言っても、その根底にあるものはとてつもなく大きな要因を含んでいる。そのような大局観に基づいた上で、これからのより良い英語教育を考え、実践していきたいと願っている。